

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度(評価)	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	佐賀市立巨勢小学校
1 前年度 評価結果の概要	・あたり前のことをきちんとする(あたきち)、凡事徹底を合言葉に、これまでの指導内容を見直しながら、各部、各学年で取組を続けてきた。達成できたところ、できていないところがあるが、全職員で共通理解を回り、「あたきち」を常に意識した指導をこれからも継続していく必要がある。 ・「笑顔かやく子供」の育成のため、知・徳・体の面から指導を積み重ねてきたが、日々、児童の不注意からのけが、他者を傷つけてしまう言動、落ちついて学習に向かえない場面が多く見られた。次年度は、児童の実態に合った校内研究を進め、教師の授業力向上、安心して過ごせる学級づくりが課題である。

2 学校教育目標	「笑顔かやく子供」の育成 ～「本気で」「元気に」「根気よく」取り組むよさに気づき、行動する子供～
----------	---

3 本年度の重点目標	① 自分で考え行動できる児童の育成 ② 「あたり前のことをきちんとする(凡事徹底)」指導の継続・推進・深化 ③ 異学年活動や地域、幼保小連携など、つながりの中で子供を育てる体制、体験活動の充実
------------	--

4 重点取組内容・成果指標 5 最終評価

(1)共通評価項目			最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組 取組内容	成果指標 (数値目標)	最終評価		学校関係者評価	
			達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	○全職員で共通理解し、児童に学びの喜びと自己肯定感を高めるようにする。 ○学力向上対策評価シートへの取り組みで、成果として児童評価値80%以上を目指す。	○学力向上対策評価シートへの取り組みで、成果として児童評価値80%以上を目指す。	A	・教師の授業力向上のために、本年度は校内研究も一人一授業を行った。教材研究や単元の作り方について学ぶなど、楽しんで授業に参加できた児童も増えた。自分の考えを持てるようになったと感じている児童の平均は72.3%だったが、高学年ほど割合が高くなり、効果が見られた。	A	・授業参観時の授業態度もよく、一生懸命授業に参加している様子が見られた。「学校が楽しい」の回答が80%を超えたことも、学力向上のバロメーターとも言える。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○誰上でも仲良くできた」と回答する児童が80%以上。 ○「学校は楽しい」と回答する児童が80%以上。	A	・学期11回ほかほかカードを実施し、放送で紹介することができたことで、自己肯定感が高まった。学校生活アンケートでは、仲良くできた児童は95.2%だった。 ・挨拶運動や個別挨拶除などの活動を通して、全職員が児童に関わりを持ち、良さを見つけられる。	A	・児童も職員もよく挨拶をしてくれる。地域での生活も正義感ある行動であった。 ・ネット等の普及により、児童に必要なモラルも時代とともに変わっていている。道德の学習でも引き続き重点的に行ってほしい。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○「困った時に先生や友達に相談できた」と答えた児童が90%以上。	B	・いじめ・命を考えた日には、担当や人権リーダーから話を聞いて定着を図った。7つの項目を主に絞って実施し、改善できた。 ・「困った時に先生や友達に相談できた」と回答した児童は75.2%だった。「いじめもちカード」や「あのねタイム」を継続し、いじめの早期発見や困り感への対応につなげていきたい。	B	・いじめ事案に対してスピード感を持って対応されている。内閣的なもので「あのねタイム」等の時間を作ることは非常に良かった。 ・「困った時に先生や友達に相談できた」の回答が80%を切っており、さらなる取組の必要性を感じる。
●心身の健康	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「先生はあなたのよいところを認めてくれた」と思うと回答した児童生徒85%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」として肯定的な回答をした児童生徒85%以上	B	・「先生はあなたのよいところを認めてくれた。」と回答した児童は、86.8%だった。学期の当初に立てた目標に対して、学期末には振り返りを行うとともに、児童の夢や目標について話し合い、自分自身の夢や目標について考えさせる。 ・出前授業やゲストティーチャーを迎えた授業づくりを行う。	A	・地域社会との関わりも充実し、その成果が出ているのかもわからない。職種も多様化しており、児童が明確な将来のビジョンを描くことができるよう今後も取り組んでほしい。 ・先生や友達に認めようという自信につながると思う。存在意義を低学年より意識させることは学力向上にもつながるだろう。
	○つながりの中で子供を育てる体制、体験活動の充実	○「たてわり班で楽しく活動することができた」と回答した児童90%以上。 ○「たてわり班を通して、上級生としての自覚を育む。」	B	・「たてわり班で楽しく活動できた」と答えた児童は91%だった。まわりがタイムでも、異学年の遊びを通して交流が深まったといえる。運動会ではたてわり班で練習したり、練習を行ったりと交流の場を確保できた。 ・「たてわり班を通して、上級生としての自覚を育む。」	B	・たてわり活動が巨勢小の特色となれば、よき学校文化になると思う。さらに充実してほしい。 ・たてわり活動で行動すると、いつもは控えめな高学年の子ももちも責任感がでていっている。
●健康・体づくり	①「運動習慣の改善や定着化」 ②「正しい食習慣と食の自己管理能力の育成」 ③「安全に関する資質・能力の育成」	①週に3回以上、外に出て遊んだり、スポーツをした児童が80%以上 ③朝ごはんを食べた児童が95%以上 ④「安全に関する資質・能力の育成」 ●児童の交通事故を0(ゼロ)にする	B	・運動委員会が大会やリレー大会を企画し、運動に親しむことができるようにする。 ・保健師や給食係を通して、朝食について啓発を行う。学期1回の健康生活チェックで児童の食生活を把握し、指導し直す。 ・交通安全教室や登下校時の安全についての指導を行う。	B	・学校の取組や保護者へのお話し、PTAやまちづくり協議会との連携が大切だと思う。取り組むことによりとても効果があるという啓発活動を充実させるよ。
	○安心・安全意識の向上	○様々な危機(アレルギー、熱中症、食中毒、けが予防等)に対する管理意識を高めた教員が100%。 ○防災避難訓練を行い、危機管理意識を高めた教員が100%。	B	・アレルギーに関する危機意識を持って指導に取り組む職員が100%。これからも様々な危機に対するの職員でも対応できるように研修を充実させたい。 ・8回の避難訓練を行い、職員研修、事前指導、事後指導を通して、災害に備えようと思わせることができた。来年度も、下校時の交通安全指導を強化していきたい。	B	・アレルギー対応や身体的配慮が必要な児童については、全職員が意識できていることが大助だ。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の上乗れを推進する。	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上乗れを推進する。	A	・4月～1月の全職員の時間外勤務の平均は31.3時間であった。教育委員会規則の時間の上乗れを達成している。 ・職員アンケート結果では、「見直しをもって業務に当たっている」92%、「毎週金曜日定時出勤の取組みが進んでいる」72%で、金曜日定時出勤に向けては、新たな取組を考えていなければならない。	A	・金曜日定時出勤をさらに進めていく必要があると思われるが、全体としては時間外勤務時間の上昇などとなっている点を評価した。 ・ワークライフバランスが崩れてしまうと、教育の質の低下につながるため全職員で話し合いサポートしてほしい。
	○笑顔あふれる職場づくり	○「気軽に相談ができ、働きやすい職場である」と答えた職員が90%以上。	B	・放課後の時間に余裕ができ、職員間で情報共有をしたり、学年を中心に相談したりする様子も多くなった。 ・「職員間の情報共有や相談も行っていきいきた。」	B	・管理職が日頃の職員の頑張りを、その職員への期待を、なにげなく話しかけたり面談したりすると、まとまりと活性化が出てくる。 ・職員間の情報共有や相談も行われており、働きやすい職場をめざして努力されている。
●特別支援教育の充実	○特別支援教育に関する教員の専門性と意識の向上	○「授業力と見直しを持たせることを意識して指導した」と回答した教員が95%以上 ○「個別対応した対応(学習・行動)ができた」と回答した教員が95%以上	A	・特別支援教育に関する研修会の実施 ・特別支援教育に関する研修会の実施 ・個別対応した対応(学習・行動)ができた」と回答した教員が95%以上	A	・授業参観をした際に、一人一人が能力を伸ばせるように、よく褒めたり、わかりやすい言葉で丁寧に授業をさせているのが印象的だった。 ・来年度は、個別対応について、具体的などの様な支援をしているのかを職員間で共有する場を設けたい。

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目			最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組 取組内容	成果指標 (数値目標)	最終評価		学校関係者評価	
			達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言
○生徒指導	○「あたり前のことをきちんとする(凡事徹底)」指導の充実	○「あたきちカード」の学年末の達成項目が20個以上	B	・「あたきちカード」の内容を意識して学校生活を送れた児童は70%だった。項目個々に置き換えると20個を下回った。取組について再考し、強化項目を設定するなど全校で一体となった取組を行っていききたい。	B	・月ごとでも行動目標等を、児童や職員に目について意識するポスター等があればと思った。 ・全校の間に小学生とよずれ違いが、以前はよく挨拶をしてきていたのが、最近はこちらから挨拶も減ってきていない。

5 総合評価・次年度への展望	●…異共進 ○…学校後進 ●…志を高める教育
「笑顔かやく子供」の育成のため、知・徳・体の面から指導を積み重ねてきたが、日々、他者を傷つけてしまう言動や落ちついて学習に向かえない場面が多く見られた。まずは安心して過ごせる学級づくりを目指して、教師の学級経営力や授業力向上を図ってきたい。 ・特別支援学級には、普通学級にも個別の支援が必要な児童が多い。生活支援員や特別支援学級支援員の支援もあるが、教員・職員室にいる教員への緊急の支援要請も多くなる。特別支援教育に関する教員の専門性の向上は、学校全体の教育活動の充実には欠かせない課題である。 ・学習指導、生徒指導ともに、学校全体で行う取組については、全教職員で共通理解を行うことで効果的な取組となる。「あたり前のことをきちんとする」の達成のために、全教職員が項目を意識して取り組む必要がある。	